国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注（６）

劉　玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系（勉強社 1977 年）所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』（影印本）を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（１）」（筑波大学人文社会研究科『筑波日本語研究』第17号）を参照されたい。本稿では、前記拙稿、及び「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（２）」（同18号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（３）」（同19号）、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（４）」（同20号）と「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注（５）」（同21号）に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、本抄物を解読する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の諸稿に詳しいが、要点また前記の諸稿において説明していない事項について記しておく。

一　翻刻の範囲を底本の二〇五頁から二二三頁とする。

一　基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込まれた小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しないことがある。

一　漢籍の引用が見られる場合、その書名または篇目名や章・節の名、作者名に‖線で記す。例えば「勝覧‖第三鎮江府禹貢　楊州之域　隋文帝於南徐置潤州　唐因之後改丹陽郡」（二〇四６）、「雪云　恵連‖雪賦　歳将暮‖時既昏　寒風積　愁雲繁」（二一一14）、「韓子‖倉詩云　離宮見尓近天墀　雨露常秋養種時　惆悵一枝嵐氣裡　無人識是万年枝　意本于此句」（二一二16）、「杜‖詩　薬残他日裏　花發去年叢　雪本歟」（二一二20）など。少数、漢籍の本文が引かれているが、書名または作者名などの情報はいっさい記載していないと見られる場合がある。このような場合について、今回、一々原本で確認するに至っていないが、『国学宝典』網絡版（http://www.gxbd.com/）、「中央研究院漢籍電子文獻瀚

典全文検索系統」（http://hanji.sinica.edu.tw/）、『中国基本古籍庫』（黄山書社出版）を検索資料として、これらの資料にほぼ同様な本文が検索できた場合に、「一之句ヲ　讀メハ　ヤカテ　サメ□イヌ事□ヲ　可知也　楼臺側畔楊花過　簾□中間燕子飛……柳絮池塘淡々風之類也」（二〇八 23～二〇九 1）とか、「補云　五俟　旧註　所引　王皇后弟五人故事可也　盖喩五楊也　玄宗毎年　幸驪山華清宮……芳馥於路」（二〇九 8～9）とかのように、引用の最初の部分に═══で記す。また、【　】内において関連の情報を補うことがある。なお、書名などの記し方については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」（筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号）において検討しており、参照されたい。

一　前記の検索資料と本抄物の引用と比較して、文字や行文の上相違する箇所が見られる。例えば、「初学記」から引かれる「晋文公与介子綏俱亡……然則禁火　並■周制也」（二〇七 4～8）において、「据左傳及史記並無」（本抄物）と「按左傳及史記並無」（『国学宝典』）とあるように異なっている。また、杜甫の詩の引用と見られる「明日ノ新火ハ　御意ノ　ヨイ者ニハ　賜也……述懐無極也　杜詩　豫宴是長纓之意也」（二〇九 1～2）について、『国学宝典』において「賜浴皆長纓　与宴非短褐」（杜甫「自京赴奉先縣咏懐五百字」詩）と見られる。これらのうち、誤記や誤植だろうところがありうるが、当時に引かれる漢籍の底本がまだ明からにしていないため、今回特に改めず、底本の通りに翻刻する。

一　幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように──線で記す。例えば、「雪本云　勾陳　呉都賦　注　星名　以侍衛帝宮　又云后宮也新曲言胡地楽　以是為学　是夷狄乱入之兆也」（二一一 7）においては、「雪本云」（蘭坡景茝の説）の部分に──線を引く。また、「春城　風抄云　心田云　此菰講者往々為刺徳宗時之詩　甚不可也……」（二〇九 11）については、「此菰講者此菰講者……」より以降はおそらく「風抄云」（万里集九の説）において「心田云」（心田清播の説）が引かれていると見られるような箇所について、「風抄云」並びに「心田云」の両方に──線を引く。「或云　紫烟為衣　其衣上綉春雲也」（二一一五 17）とあるように、「或云」は誰の説か不明だが、同じく──線を引く。ほかに、「或曰」・「或説」と記された場合について同様に処理する。

一　漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をできるかぎりそのまま写し、また、末尾「異体字一覧」にまとめて掲げる。若干□で示し、【　】内において【□「山*斤」（岸）】（二〇四 7）・

【□「門*夕」（聞）】（二〇七 18）】・【「尺+曰」（書）】（二〇七 5）・【□「人+白+八」（食）】（二〇六 1）のように示す場合があり、*印はその字または偏旁冠脚を左右でまたは内外で組み合わせた文字を、+印はその字または偏旁冠脚を上下で組み合わせた文字を意味する。一部、「流ル丶マテソ」（二〇五 7）・「周挙傳」（二〇六 11）・「作竜蛇之歌而隠」（二〇七 4）などのように、再現できない場合は、通行体に改めるが、一々説明しない。なお、以上について、初出以降は通行体に改め、特に記さない。

一　小文字で二行書きにしてある箇所が少数あり、「／」印で改行を示す。例えば、「……漢書曰郊祀／志建章武帝／作宮北治天池漸臺高／二十餘丈　名曰太液　池中起三山　以象蓬莱……」（二一一 4～5）とあるのは、それぞれは「志」「作」「二」の三字から改行している。

一　仮名については、「子」を「ネ」に改めず、そのままに写す。合字では、「〆」を「シテ」に、「丁」を「コト」に改める。

一　踊り字については、漢字の場合は「々」に、仮名の場合は「丶」に統一する。なお、仮名二つ以上の場合または漢字仮名まじり書きで二つ以上の場合は、「サムキ鴉カ　ヒラヒラト」（二〇五 6）や「相別　見ヲクリ見ヲクリスレハ」（二〇五 5）のように繰り返して写す。

一　振り仮名はそのまま写す。

一　濁点はそのまま写す。

一　返り点、一・二点と上・中・下点は、[レ]、[一]、[上]などのように[　]に入れて記す。

一　転倒符、挿入符、書入れ指示については再現できず、【　】内において説明する。

一　見せ消については■で示し、【　】内において説明することがある。

一　その他

・　頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・　句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、校注者の判断による。

・　破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。

・　その他の説明事項があれば、【　】内において記す。

二〇四

1　嚴維　字文正　越州人　為越諸暨及河南尉　又充河南嚴中丞幕府　終校書郎

2 丹陽 ■云 丹陽ハ 潤州ニテ 大江ヨリ 南ニ 在ル 在所也【この行まで「丹陽送違參軍」原典テキストが置かれている】【「梅」某字見せ消、右傍に「村」。「村云」にすべき】

3 桃抄云 韋參軍 韋荘也 蓋送[三]韋荘ヵ之[一]江北[一]也 幻謂 韋參軍 非荘韋也 按才子傳并履歴不載荘為【「非」「荘」間に挿入符あり、「韋」右傍に転倒符ある。「非韋荘」にすべき】

4 參軍事 且嚴維為粛宗至徳二年進士 韋荘為昭宗乾寧元年進士 其相去者 百二十九年也 然則

5 非韋荘決矣

6 勝覽第三 鎮江府禹貢 楊州之域 隋文帝於南徐置潤州 唐因之 後改丹陽郡

7 送行舟ハ 堀河ノ 小キナルヨリ 楊子江ノ 大ナルヘ 乗入レテ 楊子江ノ北岸ノ楊州ヘ 着也 楊子江南□有楼 曰【□「山*庁」（岸）】

8 江南偉観也 北岸乃瓜州赴楊州之路也 有楼門 曰江淮勝望也 金山寺 在[二]楊子江中流ル[一]也 於此送韋荘也

9 詩林万選 句体 意在言外 秋作愁

二〇五

1 丹陽――續云 今所送者 何人舟ソト 云ヘハ 平生心知也 日晩――両地ヲ ヤカテ 云也 江南今別処也 江北 韋

2 所赴也 一別――コノマヽ 別テ 両地ニテ コソアランスラン 秋ハ 一処ニ 居レトモ 悲シ 況送心知後也 句中對也

3 一二句ヲ 以テ 三四句ヲ 讀メハ 堪ヘカ子テ ナカルヽヤウナソ 寒鴉ハ 有情也 水ハ 无情也 心之悲者 可知也 ア【「堪ヘカ子テ」、子（ネ）】

4 ソコヲコソ 行ラント 思タ 寒鴉ハ 有情ナレトモ 吾心ヲハ シラヌ 水ハ マシテ 無心也 又ハ 日暮テ カナシイソ

5 蘭講云 日晩マテ江南ヨリ望メハ――漁菴之点也 言自[レ]朝至晩也 桃云 日晩――相別 見ヲクリ見ヲクリスレハ

6 笠ノトガリカ ミエタト 云ヤウニ アケクニワ ナニモ 見ヘヌソ 日晩ルマテ 立尽シテ 望メハ イカニモ サムキ鴉カ ヒラヒラト

7 飛タカ 其モ 飛尽テ 只水ノ 悠々ト 流ルヽマテソ 久立テ 思慕スル心ソ

8 幻謂 或点云 望ニハ[二]江北ヲ[一] 蓋預言[二]別後[一]也 村義義近之 村云 アナタヘ イツタラハ 韋方ヲ 望マハ ナニモ 見

9 エマイ　寒鴉――マテニテ　アランソ　又村講云　今ヨリ　以後　晩景ナントニ　恋シクモ　アラハ　丹陽■リ　ソナ【「コ」見せ消、右傍に「ヨ」。「丹陽ヨリ」にすべき】

10 タノ　霄ヲ　ナカメテ　思イヤリテ　ナリトモ　ナクサウテ　寒鴉ノ飛尽ンマテ　望トモ　ソナタノ音信ハ　ナクテ　只水ハカリ

11 ニテ　アランソ　只アラン者トテハ　江水渺々タランマテヽコソ　アランスラウシテ也

12 悠　韵書　悠々　流皃　詩　淇水□々　通作悠□【「淇水□々」、□「氵*悠」】【末尾□、□「漁+心」】

13 和云　離亭緑柳繫孤舟　江水江花送客秋　一片雲帆千里去　夕陽旗影逐飈悠　子安

14 毛晃　猋　卑遥切　犬走皃　又大風　月令　猋風暴雨　相如賦注　猋謂疾風自下而上　俗作飆　又作飈　然則作猋者　誤　玉篇猋部不押　犬部出之

15 玉篇風□押之　飆俾遥切　暴風也

二〇六

1 寒□　養按　事類聚前集巻第八　引荊楚歳時記曰　去冬至一百五日　即有疾風甚雨　謂之寒食　拠暦　合在清明【この行まで「寒□」原典テキストが置かれている】【「明」真下に挿入符あり、右傍に「前」。「清明前」にすべき】【□「人+白+ハ」（食）】

2 二日　亦有去冬至一百六日　断火三日　謂冬至後一百四日　一百五日　一百六日也　杜詩云　江淮間寒食日家々折柳挿門

3 注　斉人呼寒食為冷節　又曰　熟食　又曰　禁□【□「火*巳」（烟）】

4 才子傳　韓翃　字君平　南陽人　云々　徳宗時　制誥闕人　中書両進除目　御筆不点　再請之　批曰　与韓翃　時有同

5 姓名者　為江淮刺史　宰相請孰与　上復批曰　春城無処不飛花　韓翃也　俄以駕部郎中知制誥　終中書舎【「韓」右下に墨汚れか某字見せ消】

6 人　翃工詩　■■興致繁富　如芙蓉出水　云々【「工詩」二字見せ消】

7 玉屑十　唐徳宗時　制誥闕人　云々　上復批曰　春城無処云々　寒食云々　日暮云々　青烟云々　与此韓翃詩　本事詩

8 雪本　琴操

9 文公待之　不肯出　以謂焚其山亘出　遂不出而焚死是後　雑記如先賢傳　則云　太原旧俗　以介子推焚骸一月寒食　鄴

10 中記云　并州俗　冬至後一百五日　為子推断火　冷食三日　魏武帝以太原　上黨　西河　鴈門　皆冱寒之地　令人不得

11 寒食　亦謂冬至後　百有五日也　案　後漢周挙傳云太原一郡　旧俗以介子推焚骸　有龍　忌之禁　至其亡月　皆言

二〇七

1 神灵不楽挙火　由是士民毎冬中輙一月寒食　莫敢烟爨挙為并州刺史　乃作吊書置子推廟　言盛冬

2 去火　残損民命　非賢者之意　宣示愚民　使還温食於是衆惑稍□　風俗頓革　然則所謂寒食　乃是冬【□「角※半」（解）。ただ、「觧」とも見える】

3 中　非今節令二三月間也　容斎随筆　叉文類聚前集巻之八　ム云刘向新序以下　全文養引之

4 晋文公与介子綏俱亡　子綏以割腓股以啖文公　々々復國　子綏獨無所得　作竜蛇之歌而隠　文公求之　不肯出

5 乃燔左右木　子綏抱木而死　文公哀之　令人五月五日不得挙火　及周挙移□　魏武明罰令　陸翻鄴中記　並云【□「尺+日」（書）】

6 寒食断火　起於子推　琴操所云子綏　即推也　又云五月五日　与今有異　皆因流俗所傳　按左傳及史記並無介

7 子推被焚之叉　然周書司烜氏　仲春以木鐸徇火　禁於國中　注云　為■季春将出火也　今寒食準節炁【「香」某字見せ消】

8 是仲春之末　清明是三月之初　然則禁火　並■周制也初学記　事文類聚亦引之【「初」見せ消】

9 愚案　古今詩　寒食及介推者　不過一両篇　文苑英華詩　人為子推初禁火　花愁青女再飛霜

10 中州集　二月江南花満枝　他郷寒食遠堪悲　貧居往々無烟火　不獨明朝為子推

11 雪本云　韓翃　太平廣記一百九十八巻曰　■唐韓翃少負才名　侯希逸青溜　翃為従叉　後【「廣」某字見せ消】【「溜」右傍より書き入れ、「履歴ニハ　為淄青」とある】

12 罷府　閑居十年　李勉鎮夷門　又署為幕吏　時翃也遲暮　同職皆新進後生　不能知韓　共曰為悪

13 詩　韓翃殊不得意　多辞疾在家　唯末職韋処官者亦知名士　与韓獨善　一日夜将半　韋扣門急【「殊」「不」間に挿入符あり、右傍に「未」。「殊未不得意」にすべき】

14 韓出見之　賀曰　員外除駕部郎中　知制誥　韓大愕

然曰　必無此叟　定誤也　□韋就座曰　留【□「厶+虫」（雖）】

15 邸状報　制誥闕人　中書両進名　御筆不点出　又請之　真宗批曰　与韓翃　時有与翃同姓名者　為江淮刺

16 史　又具二人同進　御筆復批曰　春城無処飛花　寒食——日暮——青烟　韓翃　韋又賀曰　此非員外詩也【「処」「飛」間に挿入符あり、右傍に「不」。「不飛花」にすべき】

17 韓曰　是也　是知不誤矣　質時而李与僚属皆至　時建中初也

18 魏禁寒食　魏武帝明罰令曰　□太原　上黨　西河鴈門　冬至後百有五日　皆絶火食　云為介子推 且 北方沍(コ?)寒之【□「門*夕」（聞）】【「沍」右傍に「□処名」とある】

19 地　老少羸弱　将有不堪之患　今後人不得寒食　若犯者家長半歳刑　主吏百日刑　令長奪一月俸 吏類第八

20 同曰　周挙温食　周挙迁并州刺史　初　太原一郡旧俗以介子推焚骸　有龍　忌之禁　至其月　咸言神灵

21 不楽挙火　一月寒食　莫敢烟爨　歳多死者　挙到州作吊書置子推之廟　言盛寒去火　残損 民

22 命　非賢者意　今則三日而　宣示愚民　使還温食風俗頓革　陸 翻 鄴中記 吏文前八【「而」「宣」間に挿入符あり、右傍に「已」。「三日而已」にすべき】

23 同巻　禁烟 鑽 火　自冬至百有五日　至寒食　故世言寒食　皆称一百五　或者乃謂　自冬至々清明　凡七氣　至

24 寒食止百三日　殊不知暦家以餘分演之也　司馬彪續漢書云　介子推焚林而死　故寒食不忍挙火　至

二〇八

1 今有禁烟之説　廬象所謂　子推言避世　山火遂焚身四海同寒食　千秋為一 人 是也　太原一郡　旧俗禁

2 烟一月　周挙為郡守　以人多死　移書子推　祇禁烟三日　子美清明詩云　朝来新火起新烟　又云　家人

3 鑽火用青楓　皆在寒食三日之後　則知禁烟止於三日也而韓翃有寒食即吏詩　乃云　春城无処不飛

4 花　寒食——日暮——青烟——不待清明而已傳新火何耶　元微之連昌宮詞云　初過寒食一百六　店

5 舍無烟宮樹緑　念奴覓得又連催　特勅宮中許燃□　一百六在清明之前　寒食之後　是時店舍已無【□「火*虫」】

6 烟　而宮中燃燭　乃一時之権宜乎　或云　竜星　木之

位也　春属東方　心為大火　懼火盛故■禁火　是以寒
【「禁」某字墨汚れ】
7　食有竜忌之禁　則所謂禁烟　又未必為子推設也
8　同巻曰　清明　四時変國火　謂春取榆柳之火　夏取棗杏之火　季夏取桑柘之火　秋取柞楢之火　冬取槐
9　檀之火　周礼　賜新火　唐朝清明取榆柳之火　以賜近臣　順陽気也　輦下歳時記　禁火乃周之旧
10　制　唐乃皇朝　清明日賜新火　亦周人出火之事
11　叉文類聚後集巻之二　韓■翃　唐徳宗時制誥闕人上批曰　与韓翃　時有与翃同姓名者　為江淮【「雄」見せ消】
12　刺史　又具二人同進　上復批曰　春城無処不開花寒食東風御柳斜　与此韓翃
13　翃　天宝十三歳進士　此詩粛宗復両京後　至徳之間作也　詩林万選　冨艶体　詞冨而艶　青作軽
14　五俟　旧註　五俟　前漢元帝王皇后弟五人　成帝建始元年　同日封爵関内俟　王譚王河俟　王■成【「河」右傍に「或作何」】【■某字墨消、右傍に「商」】
15　成都俟　王立江陽俟　王根曲陽俟　王逢時商平俟陶集所載如此　異旧註【「立」右傍に「或章或紅」】【「商」右傍より書き入れ「高」】
16　後漢書列傳六十八　宦者傳　単超（セン）　河南人　徐璜下邳良城人　具瑗（エン）　魏都元城人　左1　河南平陰【1「亠*官」。以下二〇八19まで同様】
17　人　唐衡　□川郾（エン）人也　桓帝初　超璜瑗為中常侍1衡為小黄門　云々　封超新豐侯　二万戸　璜【□「止+示*頁（穎）」】
18　武原侯　■瑗東武■陽侯　各万五千戸　賜銭各千五百万　1上蔡侯　衡汝陽侯　各万三千戸　賜銭各【「■瑗」、某字見せ消】【「■陽」、「東」見せ消】
19　三百万　五人同日封侯　故世謂之五侯　注　1　音工奐反　又音綰　注　左1　玉篇　2　古桓　公玩公緩　三切　与綰同【2「官+心」】
20　注　本事詩　即一集名也　東坡詩　十五　張子野年八十五　尚聞買妾詩　江南刺史已無腸　顧氏注云孟棨（テイ）
21　本事詩　刘禹錫罷和州云々　蓋本事詩　孟棨所編也
22　春城――續翠云（棨　玉篇音啓）　三句ニ　時節ヲ　云タ　此様ナル句ツクリカ　面白ソ　註　本ハ　詩話也　宦者ハヌイ官也　以唐比漢也【「本」「ハ」間に挿入符あり、右傍に「詩」。「本詩ハ」にすべき】
23　一之句ヲ　讀メハ　ヤカテ　サメ□□□ヲ可知也楼臺側畔楊花過　簾□中間燕子飛　□花院落溶々月

【「簾□」、「巾*莫」（幕）】【「□花」、「秋+木」（梨）】【「楼臺側畔楊花過」以下四句は宋晏殊「正月十八夜」詩。『苕溪漁隠叢話』（前集巻二十六）などに載る】

二〇九

1 柳絮池塘淡々風之類也　明日ノ新火ハ　御意ノ　ヨイ者ニハ　賜也　此燭ハ　何処ヘ　行ソト　思ヘハ　五俟ノ　家ハカリ

2 也　述懐無極也　杜詩　豫宴是長纓之意也【『全唐詩』（巻〇二一六）などに杜甫「自京赴奉先縣咏懐五百字」詩に「賜浴皆長纓　与宴非短褐」とあり、「豫宴是長纓」が見えない】

3 春城　或云　飛花　衰者　喩外官失時　御柳盛者　喩内官得時也　空華云　第一　言内官トモノ　トコニモミチミチ

4 クルヲ云　飛花　衰者　喩外官失時　第二　言其内ニテ　ノタメカタノ衆也　第三四句　官ノ　大名ノ　叟ニテ　結スル也

5 淵云　寒食吊子推也　然則寒食時　有天子不知忠臣之嘆乎　此詩亦然　言子推抱木死者　為後人之戒也　蓋主

6 公□偏而子推死矣　殷鑑不遠　徳宗何不賞如翃者　唯賜燭於五俟家哉　今世無私者　天公耳　処々花柳　不隔其也【□「曰+心」（恩）】【『毛詩正義』（巻十八）などに「殷鑑不遠　在夏後之世」とある】

7 日暮　喩唐之晩也　青烟　取榆柳火　故曰青烟

8 補云　五俟　旧註　所引　王皇后弟五人故事可也　蓋喩五楊也　玄宗毎年　幸驪山華清宮　楊妃姉妹五家■【某字見せ消、右傍に「扈」。「扈」左傍書き入れ「従」とある。「扈従」にすべき】【「玄宗毎年……芳馥於路」は『旧唐書』（巻五十一）などにほぼ同文のものが見える】

9 家為一隊　着一色衣　五家合隊　照映如百花爛發　遺鈿墜鳥　瑟々珠翠粲爛　芳馥於路

10 村云　五俟　用単超等事可也　所以指官者也

11 春城　風抄云　心田云　此篇講者　往々為刺徳宗時之詩　甚不可也　才子傳　翃　天宝十三載　楊紘榜進士云々　盛

12 唐末　中唐間作者　此篇天宝十四載　安禄山之乱前作　以漢五俟比五楊　■季昌注　可也　梅謂　唐書楊貴妃傳云　天宝【「李」見せ消】

13 始進冊貴妃　三姉皆美　封韓虢秦三國為夫人云　貴妃兄楊国忠　弟楊錡（キ）　或称五宅　或称五家　皆楊氏也

14 故季昌注引前漢王氏五侯　尤為親切　第一句言玄宗末年　盛事漸過　如飛花時　危哉　比也　第二句言以御柳

15 斜比外戚楊氏五家　第三句以日暮喩[一]王者昏暗

[一] 玄宗天宝之末　不勤朝政　其楽在酒色之間而已　漢宮

16 指唐室　功恵不及功臣　偏属五楊也　玄宗者　徳宗太祖父也　徳宗即明主也　愛翃能愛刺先祖　而使制誥也【「太」字右傍に「ヒ」、とるべき】【「使」「制」間に挿入符あり、右傍に「知」。「使知制誥」にすべき】

17 雪本　寒食　容斎四筆四云　今人謂寒食為一百五者以自其冬至之後　至清明　歴節氣五　為一百七日而先両日　為【以下二一〇2までは「容斎四筆」から引くと見える】

18 寒食　故云　它節皆不然也　杜老有　鄜州一百五日夜　對月一篇　江西派云　百一五日足風雨　三十六峯労夢【「云」「百」間に挿入符あり、「一」右傍に転倒符ある。「一百五日」にすべき】【「杜老」右傍書き入れ指示あり、「杜詩三　月夜詩注　鄜芳無切　一百五日夜對月詩　在三之五丁目　鄜玉篇方朱切縣在馮翊」とある】

19 魂　一百五日寒食雨　二十四□花信風　云々　吾州城北芝山寺　為禁烟遊賞之地　寺僧欲建華嚴閣　請予作勧【□「米+田」（番）】

20 縁疎　末云　大善知五十三　永壮人天之仰　寒食清明一百六　□来道俗之観　或問　一百六所出　應之云　元微【「知」右下より書き入れ「識」とある。「知識五十三」にすべき】【□「目+折」（鼎）】

21 之連昌宮詞　初過寒食一百六　店舍無烟宮樹緑　左傳　晋文公反国　賞従亡者　介子推不言禄　々亦不及推　遂与母偕隠而死　晋侯求之不獲　以綿上為之田　曰　以志吾過　綿上者　西河界休縣地也　其叟始末

二一〇

1 只如此　史記則曰　子推従者　書宮門　有一蛇獨怨之語　文公見□　使人召之　則已聞其入綿上山中　於是　環

2 山封之　名曰介山　雖与左傳畧異　而大畧亦同　至刘向新菰始云　子推怨於旡爵歯　去而之介山之上

3 和云　江村雨過樹飛花　処々新烟日又斜　人在他郷思故□　那堪閑傍野人家　子安　魯考之【この行以降は「上陽宮」原典テキストが置かれている】【□「阝*竜」（隴）】

二一一

1 養按 玉海一百七十一 昭紀 始元々年春二月 黄鵠
下建章宮太液池中 注 如淳曰 謂之液者 言天地和
液之氣
2 所為也 臣瓚曰 太液池承陰陽津液 以作池也 師古
曰 如瓚之説 皆非也 太液池者 言其津潤所及
3 廣 三輔黄図 大液池在長安故城西 建章宮北 未央
宮西南 太液者 言其津潤所及廣也 関輔記
4 曰長安志作／関中記 建昌宮北有池 以象北海 刻石為鯨
魚 長三丈 漢書曰郊祀／志建章武帝／作宮北治大池漸臺高／
二十餘丈 名
5 曰太液 池中起三山 以象蓬莱 方丈 瀛州 壺梁
刻石象魚龍 奇獣 異禽之属 廣記云 建章宮北 池
6 名太液 周廻十頃 有採蓮女鳴鶴之舟 三輔旧事曰
日出暘谷 浴於咸池 至虞淵即暮 此池象之
7 雪本云 勾陳 呉都賦 注 星名 以侍衛帝宮 又云
后宮也
8 才子傳 竇庠（シヤウ） 字冑卿 嘗應辟三佐大府 調奉先令
迁東都留守判官 拜戸部員外郎 貞元中 出為婺
9 登二州刺史 平生工文甚苦 着述亦多 今並傳之
10 或云 此詩 元和五年庠為東都判官時作也 凡自創
上陽宮以来 百三十四年也 又續翠講云 百三十七年
11 也 故宮荒□ 不堪挙目也 新唐書列傳一百載竇群
常 牟 鞏 無庠傳【□「冫*京」（涼）】
12 續翠 注 無中程者 不中及第也 中貴 官者也
中貴ハ 遁世者也
13 鈎陳 選注 善曰 楽叶図曰 鈎陳 后宮也 服虔
甘泉賦注 曰 紫宮外営 勾陳 星也 然王者亦法
之【「叶」字は「汁」の誤写か】
14 翰 曰 鈎陳 星名 衛紫宮 今離宮 衛別以取象焉
【「宮」「衛」間に挿入符あり、「別」右傍に転倒符
ある。「別衛以取象焉」】
15 補云 注方勺伯宅編 不審 或云 伯ハ □（キ）歟 或云
方勺カ 伯宅ノ編歟 方勺伯ト 云者カ 宅ノ叟ヲ
シルイタ書歟【□「イ*自」】
16 村云 注 所引ノ方勺カ 伯宅編ト云ハ 蘇州志ノ四
十二ニ 書シテ 方勺カ 泊宅（キ）編トナス也
17 幻按 叟文類聚前集第五 引泊宅編所載刘貢父刺荊
公之詩 云々 伯作泊 又無方勺字也
18 又百一選方（ホ） 十四 泊宅編云 痔 腸風 臓毒一躰
病也 云々 伯作泊
19 文献通考（ホ） 二百十七 泊宅編十巻 陳氏曰 方勺 仁
□ 撰泊宅 在烏程 相傳張志和泊舟浮家泊宅之所
勺買田卜築 号泊宅翁 本厳【「厳」字後に挿入符あ
り、右傍書き入れ指示あり、「瀬人 幻雲考之 天文

第九庚子四月考之」とある】【「勺」「仁」間に挿入符あり、左傍に「字」。「方勺　字仁□」にすべき】【□「士+巴」（声）】

20 唐詩跋吹載安賀鵲詩云　託身須是萬年枝　注　引文選　何晏景福殿賦云　綴ルニ以[二]万年ヲ[一]　綷ヲ[ニ]スルニ以[二]紫榛ヲ[一]

21 云々　綴　連也　綷　雑也　晋武帝　華林園有万年樹一十四株

22 愁雲――史　舜崩蒼梧山　々有九峰　常有愁雲浮罩莫辯陵寝所在　遂呼九疑　云々【「云々」後に書き入れ指示あり、「今天子之居　用之恰好　今字以下雪義」とある】

23 又文選十三　謝恵連雪賦云　寒ー風積リテ　愁雲繁シ　呂向注　愁雲　陰雲也　梅云　漠々　寂皃　離々乱披皃

24 桃云　雲モ　有愁カト　見ヘテ　■漠々トシテ　不散ソ　草モ　春ニ　得意トハ見エヌ　愁アルト　□タリ　愁字ハ　上下【「漁」見せ消】

二一二

1 ニカケテ　可見ソ　雲一重　草一重　ウチカナリウチカナリシテ　荒ハテタホトニ　何処カ　大液ヤラウ勾陳ヤラウハ　ワケモ　見ヘヌホトニ　此ハ【「カ」「ナ」間に挿入符あり、右傍に「サ」。「ウチカサナリ　ウチカサナリ」にすべき】

2 大液歟　彼ハ　勾陳歟ト　処々疑也　大掖ワ　他ヲ云タ　天地和液之気　所為也ト云義モ　アリ　又承陰陽津

3 液以作池ト云義モ　アリ　勾陳ハ　星名　以衛侍帝宮又云　後宮也　又ハ　陳ハ　■堂下ノ　径也　階　除也ト　云【「道」見せ消】【「又云」右傍に書き入れ指示あり、「文選　堅」とある。「班孟堅」を指すか】

4 時ハ　ヲキ径ノヤウナ　モノ歟ソ

5 薄暮――如此　アソコ歟　コヽ歟ト　疑テ　アルクホトニ　ハヤ　スツト　日カ　暮タソ　此句カラ　賦上陽宮也　旧ノ宮殿

6 ハ　何処ヤラ　不知　アソコノ　破タ　築地ノ　スミニ　ハルサメニ　シボヌレテ　何ニヤラ　残タ　花カアルハト　思テ　見タレハ　万年

7 枝也　旧ノ物トテハ　此ハカリ也　薄暮ハ　薄ハ　迫也　暮ニ　迫ルノ　義也　又ハ　只ウスウストシタ暮ノ　タソカレ時ト　云ヤウ

8 ナ　心モ　面白ソ　特ニ　万年枝ト云ヘハ　目出度名チヤカ　昔シ　種シ時ハ　祝シテ　萬年ヲ　可保トコソ　思ツラウ　ナレトモ　今【「心」「モ」間に挿入

符あり、右傍に「マテ」。「心マテモ」にすべき】

9 八 荒レハテタマテ也

10 村云 愁雲ハ 悲風之類也 我心愁 則雲亦如愁也 昔ハ 万年枝 今ハ 残花也 猶字ハ 昔ノナコリトテ

11 此花猶残テ 開也 此蔕説唐也 然結句有道罪之句 故入此集

12 補云 大掖カ 勾陳カ 聽雨ノ点也

13 雪樵本曰 愁雲云々 二句言 宮殿已廢 雲愁草荒 何処勾陳 未易知也

14 雪云 恵連 雪賦 歳将暮 時既昏 寒風積 愁雲繁注 愁雲 深雲也 天英用之

15 雪云 薄暮云々 二句言 宮墀已荒廢 花木皆散 在人家之間 然冬青樹乃不忘万年之名 猶發花也

16 韓子倉詩云 離宮見尓近天墀 雨露常秋養種時 惆悵一枝嵐氣裡 無人識是万年枝 意本于此句乎

17 雪云 和曰 上陽廢黍离々 千古成墟叟若疑 惆悵黄昏人静後 数声鳥鵲噪寒枝 厳子安【「陽」「廢」間に挿入符あり、右傍に「宮」。「上陽宮廢」にすべき】【离（離）】

18 張楷和上陽宮云 垣蒿堦草總支离 歌□于今叟不宜 幾樹好花當路發 宮中曽是合歓枝【□「旡+廾」（舞）】

19 第二句 押宜字 不審

20 杜詩 薬残他日裏 花發去年叢 雪本歟

21 養按 玉海百五十七 唐上陽宮 地理志 上陽宮 上元中置 云々 虢州湖城有故随上陽宮 正観初置 咸亨【「随」右傍に「隋」】

22 元年廢 注 隋志 河南桃林有上陽宮 韋弘機傳 高宗常言 兩京 我東西宅 然因隋宮室日仆

23 不全 将更作 奈財用何 弘機言 臣任司農十年 省常費三十萬緡 以治宮室 可不労而成 帝大悦 詔兼

二一三

1 将作少府二官 督営繕 云々 天子乃登洛北絶岸 延眺良久 歎其美 詔即其地営宮 所謂上陽者

2 武后於上陽宮 令術家撰方域等篇 東京記 韋弘機造 上陽宮 掘地得銅器 似盆而浅 中

3 有隠起双鯉之状 魚間有四篆字 曰 長亙子孫 時人 以為李氏再興之符

4 贈楊□師 六曲唐 道士有三師 一曰法師 二曰威儀 師 三曰□師 其德高而思益 謂之 云々【この行まで「贈楊錬師」原典テキストが置かれている】【「曲」「唐」間に挿入符あり、「唐」右傍に転倒符ある。「唐六曲」にすべき】【□「金*柬」（錬）】

5 雪本云 清陰云々 査住曰 書名歟 山字未詳云々

愚謂　取野史　山書之義　於□外之意也　蓋其書

二一四

1 以小篆書之也　呂洞賓詩　肘傳丹篆千年術　口誦黄庭両巻経　又東坡云　忽見黄庭丹篆

2 句　猶傳清紙小朱書　清隠者　隠者　秘書訳義【「秘」「書」間に挿入符あり、「訳」右傍に転倒符ある。「秘訳書義」にすべき】

3 鳳管　漢書　律歴志　黄帝使泠綸師古曰泠音／零　綸音倫也自大夏之西　昆侖之陰　取竹之解谷孟康曰　解／脱也　谷　竹

4 海也　取竹之脱無溝節者也　一説　昆侖／之北　谷名也　晋灼曰　谷名　是也生其竅厚均者應邵曰　生者　治也　竅　孔也　孟康曰　竹孔与山薄厚□／也　晋灼曰　取谷中之竹　生而肉　孔外内厚薄自然均者【□「サ＋寺」（等）】

5 截以為笛　不復加削刮也／師古曰　晋説是也　断兩節間而吹之　以為黄鐘之宮師古曰黄鐘之／宮　律之最長者　十二笛（トウ）以聴鳳之鳴

6 師古曰　笛／音大東反　其雄鳴為六　雌鳴亦六　云々

7 古註　鳳管　即蕭史吏　又韵府　鳳簫　注　蕭史善吹簫　作鳳鳴　云々　又　簫字注　編竹為之　大者

8 二十四管　小者十六管　形參差　鳳□象　鄭玄注簫亦管也　形似鳳翼也【□（羽*弋）】【「差」「鳳」間に挿入符あり、「象」右傍に転倒符ある。「象鳳□」にすべき】

9 玉晨君者　泰一也　凡天帝者　有六　所謂五帝座与太一也　如礼記　天有五道　春日道　青道　夏日赤道

10 秋日白道　冬日黒道　土用黄道也　渾天説　赤道黄道　計也　天餘道也　以天分半赤道トホリ　其ヨリ

11 北ヲハ　曰内天　南曰外天　其外天日行道　曰黄道此内天有帝　曰太一　今玉晨君也　如人間天子　其太一居処

12 太后宮　當共異　有五帝座星　是外天東ハツレ也其宮曰　紫微宮　如人間侯王　凡宣夜之説已絶　今此

13 之周髀之説　雖有不合　今用渾天説也　傳之陰陽今渾天名陰陽道為我物也　出本書中【「傳之陰陽」、「之」「陰」間に挿入符あり、右傍に「曰」。「傳之曰陰陽」】

14 樵本曰　大上洞玄灵苦妙経有十方天尊　玉宸君其一也　又云　八万之帝一也

15 案　君山詩注　黄庭経玉宸君　即黄老君之号也

16 旧註　道家三清　上清玉宸君居也　黄庭経云　大上大道玉宸君　注　大上之尊也　本行経玉宸君　即黄老

17 君之号也　玉晨君　古注并唐音遺響　晨作宸

18 紫烟――続翠云　唐ニハ　今モ　道士ワ　衣裳美也地ノ紫ナル上ニ　五色ノ雲ヲ　綉スル也　清隠山書ワ　手ニ　トレハ　罰

19 カ　アタル物也　細字ニ　カイタ　人間ノ者ノ　見マイ　書ヲモ　能看也　衣モ　此如書モ　如此衣服カラ　事業カラ　清イ【「此如書」、「モ」「此」間に挿入符あり、「如」右傍に転倒符ある。「如此書」にすべき】

20 人也　夜ハ　必コヽニワ　イヌ　月ノ面白時ハ　上[二]三清天[一]　見玉晨君也　道士ノ叟ナレトモ別ニ　心ヲ　寄タト　見也　仙人モ　我可【「ト」「見」間に挿入符あり、右傍に「可」。「可見也」にすべき】

二一五

1 仕ノ　玉晨君ニハ　能仕也　我仕人主モ　如此ト云処ヲ　アラハス也　将鳳管之点也　我様ナル者ノニ　ヨリツクヘキ　人テハナイソ　之義也　以上続翠

2 淵云　鳳管又如鈿蝉乎　又学鳳鳴乎　月當中天　群動息時　吹管出仕スル也　吹ー向ハ　回向也　コヽニテ閑吹管ワ　天上ヘ回向スル乎

3 木蛇云　吹ー向之点　可也　回向ハ　畢竟シテ　タムクル義也　鳳形管ヲ　吹テ　玉宸君ニ　タムクル也　玉宸君ハ　天帝也

4 漁菴点　将テ[二]鳳管[一]吹向ス――也　吹向ハ　唐世話也　村云　向ウ[二]テ玉宸君[一]之義也　或云　向字　言向天帝官以行也　君向

5 瀟湘我向泰之向也　補云　向ウノ之点　意浅　向ワラン之点　意深也　想是可向天帝　非凡人之所測也

6 梅云　将スル[レ]鳳ヲ管　唐音遺響二　張仲素塞下曲云　交河北望天連海　蘇武曽将漢節帰　盖字持之義也

7 韵會　陽唐　将　資良切　増韵　又奉也　即也　賣也　持也　挟也　与也　偕也

8 桃抄云　唐士テハ　三教ノ中ニテ　道士カ　第一ウツクシク　出立也　紫烟衣上ハ　只謂紫衣也　烟字ハ添テ云ソ　又ハ　紫色ナ

9 ル　烟雲ノ　紋ノアル　衣ニテモ　アラウソ　清隠ハ道士ヲ　云也　道家亦佛教ヲ　マ子テ　無尽ノ　名ヲ云ソ　佛教ニハ　梵ト云ソ

10 梵ハ　簡浄ノ　心也　サテ　道家ニハ　清字ヲ　使テ　三清ト■　紫清　太清　上清ト　云ソ　佛教ニ欲界ハ　色界　無【「ニ」見せ消、右傍に「テ」。「三清トテ」にすべき】

11 色界□ト　云ニ　似セテ　云ソ　サテ　此モ　清隠ト云ハ　道士ノ居処ヲ　云也　佛教書ハ　七千蔵也道蔵ハ　一万巻アルト　云ソ

12 小篆ハ　今ノ古文也

13 村云　清隠　謂隠文秘訣也　山書　如吾徒所謂山僧

也　蘭云　清隠山ノ書トヨムハ　非也

14　一義云　仙人所着之衣　蓋非塵服也　剪破紫烟青雲以服之也

15　山書　言道士居山也　謂之山人　故呼其書為山書也

16　慈氏云　所謂道士之詩　多用山字　杜詩所謂　山瓶乳酒下青雲之類也

17　雪樵云　紫烟――二句　蓋一句謂衣裳可見　二句謂勲業可愛　或云　紫烟為衣　而其衣上綉春□也【□「白±云」（雲）】

18　明月在中天　是午夜也

19　和云　幾度乗驟駕海雲　星冠霞帔鶴為紋　此行應向蓬莱去　何處尋幌得訪君　子安

二一六

1　和孫明府　幻案　趙與旹賓退録第九巻　唐人称縣令曰明府　而漢人謂之明廷　見范□言張俊傳　明府以【この行まで「和孫明府懐舊山」原典テキストが置かれている】【□「日※華」（曄）】

2　称太守　山陰老叟称刘□　刘翊称和拂　高獲称鮑昱皆然【□「宀+竜」（寵）】

3　明府　昔守牧　今言縣令也　凡在州府郡廳　執政治民者　其所視欲明　其所行欲清之義也　明字　美称之也

4　五柳先生　陶集第五　五柳先生傳　注　藝苑雌黄曰世人言縣令事　多用彭澤五株柳　雖白楽天六帖亦

二一七

1　然　以予考之　陶淵明　潯陽柴桑人也　宅辺有五柳樹因■號五柳先生　後為彭澤令　去家百里　則彭【「別」見せ消】

2　澤未嘗有五柳也　予初論此　人或不然其説　比観南部新書云　晋書陶淵明本傳云　潜少懐高尚　博学善属文　嘗作五柳先生傳以自況　先生不知何許人不詳姓字　宅辺有五柳樹　因以為号焉　即非彭澤令時所栽　人多縣令事　使五柳誤也　豈所謂先得我心之所同　然者与苕溪漁隠曰　沈彬詩

3　潜彭澤五株柳　潘岳河陽一縣花　皆語也　又見漁隠後集第三

6　趙嘏贈王明府詩　五柳逢秋影漸疎　陶潜愛酒不知皈但存物外醉郷在　誰向人間問是非

7　五柳――續翠云　五柳先生ハ　本ヨリ　山中人也　妻子ヲ　扶持セントテ　出レトモ　ヤカテ　不顧　餓又隠也　明府モ　如淵明ニ　ヲカ

8　シケナル者ニハ　不可折腰ト　云テ　隠居スル也　淵明本意在山中也　人間ヲハ　客ト思イ　山中ヲハ　真ト　思ホトニ　曰偶

9　然也　陶詩皆如此也　三之句ハ　人間ノ悲ヲ　云ヘキ

カ　サワナクテ　山中ヘ　皈度心ヲ　白鷴ニ　寄セテ
云也　月字　面

10　白シ　為五斗折腰トハ　不云シテ　此月カ　面白ホ
トニ　サコソ　白鷴モ　皈度アルラント　云タ　人
間懶キ　心ヲ　アラハニハ

11　不言シテ　見月多[二]皈思[一]ト　云ハ　妙也　サ
コソ　故山月ノ　面白カルラントテ　帰リタカル也
淵云　三四言　仁心及物　知

12　明府為人也

13　桃抄云　五柳――淵明帰去来辞　雲無心而出岫　鳥
倦飛而知還之謂也　秋来――白鷴ハ　文章アルニ
依テ　篭

14　ニ　入ラレテ　辛苦ヲシテ　ヲルソ　賞翫ハ　セラ
ルレトモ　篭ヲ　出ニハ　ヲトリソ　明府カ　心モ
官禄ヲ　得テ　身ヲ　養テ

15　朝廷ニ　居ヨリハ　山中ヘ　帰テ　自由ナルニハ
ヲトリソ

16　補云　淵明初為長沙曽孫　欲興晋室　然則刘氏扛鼎
司馬灰冷　故帰隠也　吁唐之晩也　雖未移宝□　其
【□「ネ*乍」】

17　衰者　不異晋也　於是明府亦懐旧山　實後世一淵明
也　此詩全篇代明府寫其□中也　述明府懐　則雍陶
【□「月*匋」（胸）】

18　意亦含蓄於其中也　漁菴云　全篇謂明府　則其語重
疊　似非唐詩也　一二句　述明府志　三四句自言也
言不

19　唯明府懐旧山　雍陶亦見月多皈思也　於是　深識明
府懐旧山之情也　漁菴義雖佳　不如前義乎　又云
門

20　種五柳者　不在彭澤　而在栗里也　雖然五柳先生只
取于淵明之義而已

21　篭ノ中ノ鳥ノ心モ　知ラレケリ　吾者深山ノ奥ニ
栖ヘバ　大心院□□一寓囚于丹波時　自武田大勝大
夫送白百喜鳥詠

二一八

1　幻按　才子傳　雍陶　竟辞栄　閑居廬岳　養痾傲世
与塵事日冥矣　然則雍陶亦□□山之情乎　雖然不如

2　指孫也　本在山　陶詩　採菊東籬下　悠然見南山
之謂也　淵明在南山下采菊　不図流

3　在人間作明府也　陶皈園田居詩　其三云　種豆南山下
草盛豆苗稀

4　淵明集第二　帰■田居六首　其一云　少無適俗韻　性
本愛丘山　誤落塵網中　一去三十年　覇鳥恋旧林　池
魚思【「図」見せ消、右下に「園」。「帰園田居」に
すべき】【「覇」右傍より書き入れ、「恐覊字乎」と

ある】

5 故淵　開荒南野際　守拙帰園田　云々　久在樊篭裏
復得返自然　幻謂　以彼詩見此詩　則句々有味也

6 淵明集第三　還旧居云　疇昔家上京　六載去還旧　注
南康志　近城五里地名　上京　亦有淵明故居

7 雪樵本曰　五柳云々　全蒿言　身在雲霄之上　意在山
林之間　今孫明府本自在山者　偶然落人間為縣令　故
帰

8 心罔措　而似篭中鸎　今不云□　■曰放則妙也【□「人
+小」（尓）】【「日」某字墨消し】

9 和云　自_覚前非棄此山　素持廉譲有■■間無　三年
歴遍梁蒙路　錯認**鶏鵰**似白鸎【■■「衰有」二字見せ
消】【「■」「間」間に挿入符あり、「無」右傍に転
倒符ある。「有無間」にすべき】【「**鶏鵰**　左傍より
「□□□□□□玉篇」と、小文字書きで「玉篇」から
引くところがある。薄く識別できない】

10 贈日東鑒禅師　補云　比叡慈覚大師入唐時　其徒有
五人　々々之内　有鑒者　鑒禅師必其人乎　蓋北山
竜安【この行まで「贈日東鑒禅師」原典テキストが置
かれている】【「慈覚大師」右傍より書き入れ指示あ
り、「名　圓仁号　前唐院大師　第三座主」とある】

11 寺　鑒禅師旧迹也　然曰　禅師　則豈教僧哉　或云
教僧互呼禅師　未足信焉　嚴子安和云　来日乗杯泛
渤

二一九

1 潮　雲間飛錫到鳴條　禅心随処無痕迹　月満秋空照沉
寥　子安詩　似指禅宗　雖然子安亦不知鑒

2 何人乎　幻謂　日本禅宗濫觴于吾　建仁開山千光祖
實趙宋末也　然則李唐之時　日東無禅宗決矣

3 鑑必慈覚徒乎　蘭義亦如此也　幻又謂　吾邦教僧到彼
邦　嗣禅宗乎　又按　元亨僧史　慈覚大師文宗

4 開成三年七月二日　着唐國楊州海陵縣　本朝承和十四
年九月帰朝　着大宰府　乃唐大中元年也　又按
才子傳　鄭谷光啓三年　右丞柳玭　下第進士也　自宗
宣大中元年　至僖宗光啓三年　相去四十一年也　鑑従
【「自」「宗」間に挿入符あり、「宣」右傍に転倒符
ある。「自宣宗」にすべき】

6 覚慈帰朝乎　又慈覚帰朝之後　鑑独留于唐乎　然年代
少与鑑隔　恐別有鑑者乎【「覚」右上に挿入符あり、
「慈」右傍に転倒符ある。「慈覚」にすべき】

7 暁風云　監　何人哉　或云　慈恵大師入唐時　有五人
同行　鑒其一也　元亨釈書慈恵傳　無入唐事【「慈恵」
右傍より書き入れ、「名　良源　第八座主」とある】

8 幻案 王荊公集三十 和平甫招道光法師詩末云 新句
得公還有類 古人詩字恥無僧 鴈湖李璧注云
9 詩字有僧 如賈島 僧敲月下門之類 鄭谷雲臺集 其
詩用僧字 凡三十五処 故詩人云 仲先筆
10 起多篭鶴 鄭谷詩壇愛惹僧 蓋谷詩好使僧 而魏野
仲先好使鶴字 二公僧鶴 格致清高 故句多及之
11 才子傳 鄭谷多結契山僧 曰 蜀茶似僧 未必皆美
不能捨之 斉己□詩巻来表謁谷 早梅曰 前村【□
「推+乃」（携）】
12 深雪裏 昨夜数枝開 谷曰 数枝非早也 未若一枝
佳 己不覚設拜 曰 我一字師也 云々 補云 讀
■此傳【「也」見せ消】
13 而吟此詩 則有味也
14 鑒禅師 幻謂 禅師者 未必窟定于禅宗 教僧亦有
禅師之称也 按岸宝洲釈氏譬古畧云 甲辰景徳
15 元年 日本國僧寂照賚(モツ)テ本国 禅師源信所陳経論義目
二十七條 問疑于四明 法師知礼 受教帰國教行録
16 源乃恵心僧都也 非禅宗矣【「源」右下に「信」。「源
信」にすべき】
17 故国——續翆云 一之句 有二説 二句 有二説
此篇言外有無限心 無[レ]心[レ]渡[レ]潮海 言浮
雲流水 処々為■ 不【「渡」「潮」間に挿入符あり、
「海」右傍に転倒符ある。「渡海潮」にすべき】【「客」
見せ消、右傍に「家」。「処々為家」にすべき】
18 必欲皈故国也 一義云 故国ヨリ 無心ニシテ渡[二]
海潮[一] 言無心而自[二]日本[一]渡[レ]海潮 到
[二]唐土[一]也 老僧 指鑑也 鑒ノ方丈ヲ
19 中條ヘ 寄セテ 居也 一義云 老禅 指[二]中條
住持[一]也 中條ノ 老禅ニ 鑑禅師ノ 倚テ居也
蓋中條方丈倚老禅之義也
20 夜深——法門也 此人無心而居此位也 孤猿叫落中
岩月之心也 此境界ヲ云ヘトモ 其ヘノ心法ヲ 錬
得テ 光明赫
21 々タル皃ヲ云也 寂寥ハ 声モナク 皃モナキ 万
境寂然之処也

二二〇

1 村云 一之句 以[二]無心無念而渡海之義[一] 為優
也
2 故国——桃抄 査住老人ノ心ハ 海潮万里チヤホトニ
可皈トフ 心カ ナイソ【「ト」「フ」間に挿入符あ
り、右傍に「思」。「可皈ト思フ」にすべき】
3 故国——鑒見地 無辺刹界 自他隔毫端 有維摩摶取
妙喜国之機用也 方丈亦以鑑比維摩也
4 淵曰講 義堂曰 再三吟有異味 トハカリ 云也 岩
頭托鉢帰方丈ト 心得タ 佛ハ □中道 故二月十五

日　大蔵也【「淵」「曰」間に挿入符あり、「講」右上に転倒符ある。「淵講曰」にすべき】

5 故國ト　云テ　可帰ノ　日本モナシ　客土ト云　唐モナシ　一念カナウ　処ヲ　無始劫来ト　指也　更言帰路三千里　好把鳥

6 藤汝自携　又云　楊柳依々暗結愁　云々　又云　宿鷺亭前風擺柳　錦官城裏雨催花　又云　西山

7 瞿耶打鼓　北倶盧洲上堂　相ニハ　有隔性ニハ　無隔本来無一物　水火一処　別無行脚相　中條即日本也

8 指三尺身為松堂也　夜深雨絶処　有一点光明

9 蘭講　九淵傳　續翠云　中條ハ　中道実相也　夜深云々　寂滅現前処　脚下放大明光也　村菴云　続翠講【「大」「明」間に挿入符あり、「光」右傍に転倒符ある。「大光明」にすべき】

10 儒釈書者　皆妙也　晩年講三体詩　多以禅教解之實不可也　就中解此詩者　大不可也

11 村講云　夜深――或云　挑心灯照破衆生塵労也　不可也　一義云　鄭谷有　二乗見者如蛍火　又不可也一義

12 柳下禅師云　如蛍火之小　又不可也　此詩只言老僧方丈寂寥之皃　杜詩　蛍入定僧衣　坡詩　只見孤蛍自

13 開闔之類　或云　夜深雨絶　指[一]胸中塵労煩悩尽処[一]　或云　三四句　洞家所謂正中偏也　此義両不可也

14 鄭谷　雲臺編中　喜秀上人相訪詩　他夜松堂宿　論詩更入微

15 雪本曰　故国云々　又　或云　凡為衲子者　以天為笠　以地為鞋　以須弥為柱杖　去無所去　来無所来謂

16 之中道花离　二辺空有水出　纏地月独処　法性空也全篇此義也　樵本曰　故国云々　趙曰　一意格　或云

17 第一句　到処安居　不思故郷也　又言　鑒禅師　見地明白十方刹　土自他不隔毫端　而有維摩在毘耶

18 大城摶取妙喜国　如陶家輻之機用也　第三之夜深即洞家所謂正法也　第四之一点山蛍　脚下放大光明

19 而照破無辺刹界也

20 樵本曰　山蛍者　吾佛為螺髻仙人　名向闍梨　常行第四禅　出入息断　在一樹下　兀出不動　鳥以謂木

二二一

1 即於髻中生卵　又永明壽　自愛具衣　不繒纊　食無重味　持頭陀行　嘗習定天台天柱峯之下

2 有鳥類尺鷃　巣衣衫中　是皆出乎無心　山蛍之語　亦於是　可知矣　和曰　来日云々　盖拠

3 嚴氏和觧之　則或説可也　雪本曰　杜筠　生荀鶴
早着詩名　嘗■謁王朱全忠　与之坐　忽【「謁」見せ
消】【「謁」「王」間に挿入符あり、右傍に「梁」。
「嘗謁梁王」にすべき】
4 無雲而雨　王以為天泣　不祥　命作詩　称意　王喜之
荀鶴寒進　連敗文場　甚苦　至是遣送
5 名春官　太順二年　裴贄侍郎下第八人登科　正月十日
放榜　杜荀鶴生朝也　王希羽献詩
6 曰　金榜暁懸生世日　玉書潜記上昇時　九華山色高千
尺　未必高於第八枝　荀鶴居九華　号
7 九華山人　才子傳第十　□本曰　高若訥後史補　梁園有
冨家子杜四郎　号杜荀鴨　比杜荀鶴【□「椎+灬」（樵）】
8 有詩即題■　賓親或汗漫之　即云　三十年来塵拂面
如今始得一枚泥【「壁」見せ消、右傍に「壁」。「即
題壁」にすべき】【「賓」右上に挿入符あり、「親」
右上に転倒符ある。「親賓」にすべき】【「枚」右傍
に書き入れ、「古作 検 □二字」とある】【「枚」左傍
に書き入れ、「許厳切　耕土具　鍬属」とある】【□
「サ+枚」】
9 故国――鑒禅師入唐シカタ　我カ　故國ヘ　万里ノ
波涛ヲ　渡テ　可帰ト　思フ心ハ　チツトモ　ナイソ
ナセニト云ヘハ
10 本分ソ　家山ハ　別ニハ　ナイソト　心得タソ　サ
ルホトニ　処々是吾本土ナリト　思ソ　査住老人ノ
心ハ　海潮万里チヤ
11 ホト 三 帰ラント　思フ心カ　ナイト　云ソ　又或
説ハ　故国無心ニシテ　トヨムソ　日本ノ故國カラ
無心ニシテ　海潮ヲ
12 渡■　来タソ　何 様 　今ハ　老僧方丈ハ　中條山ニ
子マラレタソ　言此　老禅ハ　中條山ノ　方丈ニ
独坐シテ　イラレタソ【「ヲ」見せ消、右傍に「テ」。
「渡テ」にすべき】【「子マラレタ」、「子（ネ）」】
13 近キ詩ニ　詩禅方丈トモ　作タソ　夜深――凡人ノ
難忘ハ　故郷ノ　念也　シカルニ　鑒禅師故国ニ
帰
14 ルニ　心ナシ　カヽル無心ノ　道人ハ　夜深雨絶テ
老松ノ　アル　堂ニ　トツホト　坐禅シテ　居ラレ
タリソ　此ニ　不居シテハ　ナンタル【「タ」「リ」
間に挿入符あり、右傍に「ナ」。「居ラレタナリソ」
にすべき】
15 処ニ　可居ノ　坐敷也　其時　蛍カ　只一ツ　ヒツ
カヒツカトシテ　照レタ　イカニモ　シツカナル
ナリソ　照テ　寂寥トモ　讀タソ　寂
16 而常照ノ　処也　慈氏ノ義ニハ　昏暗ノ　众生　無
明ノ　ヤミノ　中ニ　此老禅ノ　恵光ハ　一点ノ
山蛍也　此モ　面白ソ

17 雪本　夜深云々　三句言　寂滅現前之処也　四句言脚下光明也　■■■■■■■■　然山蛍与江湖集人之金陵頌【「四句言脚下光明」七字、見せ消】

18 良霄桂月取中庭　蛍在青莎葉底鳴　別我寸心如寸鉄不知南国幾多程　又續灯録廣慧禅師

19 佛為無心悟　心因有佛迷　佛心清浄処　雲外野猿啼之意　相同也

20 法運通塞志　第六佛祖統紀　巻四十曰　敕衛尉李義表　黄水令王元策往西域遊歴百餘國　至□【□「田*比」】

21 離耶城東北維摩室　元策以手板量之　縦横得十笏因号方丈　復登耆闍崛山　刻碑紀唐威徳

22 和云　来日乗杯泛渤潮　雲間飛錫到鳴條　禅心随処無痕跡　月満秋空照流寥　厳子安

二二二

1 旅懐　詩林万選　推敲体　追琢字眼　題作旅舘遇春色作氣　愁作秋　杜荀鶴　新唐書無傳【この行まで「旅懐」原典テキストが置かれている】

2 續翠云　月――夜半マテ　居タ間ニ　クモリテ　欲雨也　月モ　収[レ]光　星モ　収彩タレハ　ソヽロニ愁ニナル也　月ノアル時ハ　岳色

3 モ　見ヘツルカ　陰テ　不[レ]見　又　夜深　則江声モ　高キ　杜詩　高枕遠江声之謂也　ヤカテ　雨カフルホトニ　十年モ　廿年

4 過シ　カタノ叟ヲ　ヲモイツヽケタ　言ニモ　云ワレヌ　叟カ　サラリト　来ル也　別源　秋風白髪三千丈夜雨青灯

5 五十年之心　如此□□　淵云　秋夜賞月　可慰愁也客中遇雨　其情難柰

6 補云　月華　星彩　岳色　江声　一時和雨　為愁也幻謂　非也　一二句　言半夜以前　未雨之時也

7 梅云　第一句押韻　故不入前對格　本集乍　旅舎遇雨【「乍」は「作」か。左半分は虫食いか】

8 星彩　坐来収ハ　ツイクノル間ニ　マツクラニ　成タヨ　補云　坐来ハ　俄頃刻之義也　双桂　観春雨詩云庭下花房吟

9 裏重　門前柳色来坐深　坐来収　言頃刻之間星月之暗也【「色」「来」間に挿入符あり、「坐」右傍に転倒符ある。「坐来深」にすべき】

10 月華云々　全菫言　旅舘坐来　頃刻之間　星月収光唯有[三]嶽色ノ入[レ]眼-底　江声ノ来[二]耳辺[一]而已　於是十年叟

11 和雨到心頭　蓋星月収光　則此兆也

12 ■■■【「樵本曰」三字見せ消】

13 厳子安和　一曲南音宿雨収　帰鴻落葉満山愁　故人

千里無書到　近日相思捻白頭　子安

二二三

已前共七首

村云　第三句不喚第四句　而述其心也　第三　第四　自然　来也

心田云　以て[二]天象時節を[一]説者也　日暮　日晩　薄　■暮　明月　秋来　夜深

半夜　是也【「落」見せ消、右傍に「薄」】

〈異体字一覧〉（　）に通行体を入れた。なお、【　】において*印と+印で記すものを掲げない。また、操作困難なため、一部ユニコードには文字がないものも割愛した。

曰（因）　韵（韻）　渊（淵）　往（往）　華（華）
畀（界）　會（会）　堦（階）　盖（蓋）　鮮（解）
廻（廻）　乾（乾）　逹（逃）　鴈（雁）　宜（宜）
亰（京）　況（況）　教（教）　竅（窍）　溪（渓）
讐（稽）　决（決）　縣（県）　嚴（厳）　國（国）
比（頃）　昏（昏）　冊（冊）　雜（雑）　參（参）
尓（爾）　峀（時）　實（実）　寫（写）　众（衆）
商（商）　疊（畳）　巢（巣）　翆（翠）　節（節）
迁（遷）　曽（曾）　嘗（嘗）　巢（巣）　總（総）
續（続）　臺（台）　遲（遅）　疇（畴）　腸（腸）
黨（当）　德（徳）　獨（独）　柰（奈）　發（発）
廢（廃）　范（範）　庶（廟）　冨（富）　卩（部）
并（並）　覓（覓）　萹（篇）　峯（峰）　豐（豊）
厶（某）　皃（貌）　旡（無）　夢（夢）　离（離）
畧（略）　刈（劉）　灵（霊）　炁・氣（気）
皷・鼓（鼓）　俟・侯（候）　昆侖（崑崙）
事・叀（事）　两・兩（両）　廿（二十）
隋（隋）志　大（太）液　着（著）述

〈付記〉本稿は 2016 年度中華人民共和国国家社会科学基金項目資助（一般項目/項目号 16BZW062）を得たものであり、その研究成果の一部とする。特記して感謝を申し上げる。

リュウ　レイ／北京師範大学外国語言文学学院　副教授

（二〇一七年一一月二一日受理）